

# ヴェーンカタラーマン博士 東京センターでの質問に対する回答 その1

問い：『ラーマヤナ』の物語の中で、シーター妃はどのようにして悲劇的な最期を遂げなければならなかったのでしょうか？ 教えてください。

回答：スワミは、『ラーマヤナ』は、神がラーマとシーターという二つの姿を取って地上に現れて、神自身によって特別に演じられたドラマであったと宣言されました。ヴェーダーンタ哲学の用語でいえば、ラーマはプルシャ、シーターはプラクリティと呼べるでしょう。ヴェーダーンタの哲学による説明を続ければ、宇宙が創造される前はプルショーッタマ（純粹意識）しか存在しませんでした。宇宙創造の時に、プルショーッタマの一部が二つに分かれて、プルシャとプラクリティになりました。学者たちはプルシャを純粹意識と同一視し、プラクリティをシャクティ、すなわち神聖なエネルギーと同一視しますが、他の人々は、プルシャとプラクリティを、シヴァとパールヴァティというような固有名詞で呼んでいます。この導入部の締めくくりとして、プルシャは時として男性的側面として特定され、シャクティは女性的側面として特定される場合があることを、忘れずに紹介しておかなければならないでしょう。事実、南インドでは、夫はプルシャンと呼ばれているのです！ また科学に関して言えば、その大部分は不活性の物体を扱うもの、すなわち自然界の不活性の側面を扱うものであることを付け加えておいてもよいでしょう。そして、よく知られているように、ここではエネルギーが重要な役割を演じます。事実、アインシュタインが  $E = mc^2$  という公式を通じて立証したように、エネルギーと物質は同等なのです。

ラーマとシーターのことに話を戻せば、スワミがおっしゃるように、彼らは二人で一つの劇を演じたのです。さて私たちは、シェークスピアの劇を観に行くと、劇を観ながら笑ったり泣いたり、喜んだり悲しんだりします。しかし劇場を出たら、私たちはいつも苦しまなければならない人の役を演じていた役者を気の毒に思うのでしょうか？ そんなことはありません。せいぜい、その劇の中にどんなメッセージがあったのかを考えるくらいです。私たちは、ラーマヤナもそのようにして見るべきなのです。スワミはこうした考え方を繰り返し強調されましたが、ここでその例をいくつかご紹介しましょう。

## 【出来事その1】

これは何年も前にコダイカナルで起きたことで、私はこのことをサンパット博士（サイ大学の三人目の副学長）から直接聞きました。たまたま、スワミがコダイにいらっしゃった時に、（ラーマ神の降誕祭）ラーマナヴァミのお祭りが祝われたことがあります。その朝、スワミは非常に上機嫌で、朝食が終わって、スワミと学生たちだけで朝のセッションの席についていらっしゃいました（サンパット博士も同席していました）。スワミはラーマの神像などを物質化されて、ラーマヤナの出来事についての話をお始めになりました。その中で、スワミが、若いラーマとラクシュマナが、ヴィシュワミトラに導かれて、ジャナカ王の王国の首都であったミティラーの町に入った時の状況を描写していらっしゃいました。サンパット博士は、その話に割って

入って、王宮のバルコニーに立っていたシーターが通りを見下ろし、ラーマの美しい顔を見て、あの人は誰だろう？ と考えた、学生たちに説明をしました。

突然スワミが激怒されて、大きな厳しい声で、  
「私の学生たちにそんな卑猥な話を紹介して、いったい何のつもりだ？」と言われました。サンパット博士は慌てて、おずおずと、  
「スワミ、本当に申し訳ありません。でも、有名なタミル語の歌の中では、そのように歌われています。実際、多くの有名な歌手たちがその歌を歌っています。それは有名な詩人が書いた歌です」と言いました。  
スワミは満足せずに、すぐに次のように言い返されました。  
「くだらないことを言うんじゃない！ その詩人はそこにいたのか？ 私はそこにいた。そして実際に何が起きたのかを知っている！ ラーマとシーターは、人生の多くの側面に関するドラマを演じ、人生をどのようにダルマに沿って生きるべきかを実地に示すために地球に降臨したパラマートマ（至高神）とデーヴィ（女神）以外の何ものでもない。その神聖なドラマを安っぽい映画に作り変えてはいけない！」。

つまりその時スワミは、ラーマヤナとは、神御自身が、ラーマとシーターの二つの役を演じながら、上演されたドラマであったことを、非常にはっきりと示されたのです。

## 【出来事その2】

これは上記の出来事よりもずっと後に起きたことです。ある日の夕方、通常のバジヤン セッションの後に、スワミはトライー ブリンダーヴァン（ホワイトフィールドのお住まい）で、学生たちや一部の教師たちと共に座ってサットサング（善き仲間との交わり）をしていらっしやいました。私もその場にいました。

話がラーマヤナのことになり、いなくなったシーターを、ラーマとラクシュマナがどうやって探しに行ったかをお話になった後で、スワミは、スグリーヴァ（猿王）が隠れていた場所にラーマが到着した時の様子を描写されました。スワミは、ラーヴァナがシーターを誘拐したという説明をラーマから聞いたスグリーヴァは、自分が隠れていた山の上を飛んで行った、空飛ぶ戦車から落とされたいくつもの宝石を束にしたものを持ってきた、と仰いました。その時スワミは、

「宝石を見た後、ラーマはラクシュマナの方を向いて、『兄弟、この宝石の中に、どれか見覚えのあるものがありますか？』と尋ねました」と言われました。

もちろんこの出来事はよく知られています。スワミはここで話を止めて学生たちに、  
「宝石はラーマの妻のシーターのものでした。ラーマはそれらの宝石を何度も見ていたはずで、それをすぐに見分けることができたはずです。でも彼はラクシュマナに確認させました。それはなぜでしょうか？ 誰か応えることのできる人はいますか？」とお尋ねになりました。

私たちの誰もが、完全に面喰ってしまいました。というのも、誰一人としてその件をそんな見方で見た者はいなかったからです。私たちはただ、書かれていることをそのまま受け止めて先に進んでいたのです。私たちが答えを出すことができないのをご覧になって、スワミは微笑んで、次のように仰いました。

「神が肉体をもって降臨するとき、しばしば神は、後世のすべての人々に対してメッセージを残すために様々な出来事を演出します。皆さんは、このときラーマとラクシュマナとシーターは、皆ほぼ同じ年代で20代半ばであったことを思い出さなければなりません。彼らだけが深い森の中で小さな小屋に住んでいたのです。ラーマはしばしば出かけて、森の中で瞑想している聖仙たちを苦しめていた悪鬼たちを退治していました。これは、その前にラーマが聖仙たちに約束していた通りの行動でした。ラーマは、出かけるときはいつでも、ラクシュマナを残してシーターを守らせていたのです。

ラーマから宝石を確認するよう尋ねられたラクシュマナは何と答えたでしょうか？ ラクシュマナは言いました。

『お兄さん、私は母なるシーターがどのような宝石を身に着けていらっしやっただかは存じません。私は一度も彼女の顔を見たことはありません。私の頭は常にお辞儀をした位置にあり、私は彼女の御足しか見ていませんでした。ですから私は、これらの足首を飾るアンクレットは間違いなく彼女のものであるとすることができますが、それ以外の宝石に関しては、私には何も言えません』」

それからスワミは、学生たちにこうおっしゃいました。

「ラクシュマナのその言葉は、このカリユガの時代の君たちのために残された言葉です。というのも、君たちは目も心も全くコントロールできていないからです。決してそれを忘れないように！ ラーマーヤナの中の一つひとつの出来事は、誰かに対する教訓なのです。いつもラーマーヤナをそのような観点から研究なさい！」

ここで、私が帰依者たちに向けて話していた時の体験をお話ししましょう。いつもの通り私は、自分の話が終わると聴衆に向かって質問はないか尋ねました。その時一人の若い女性が質問したのですが、それは、東京から寄せられた質問と同じような精神から寄せられたものでした。彼女は言いました。

「シーターは純潔であり、実際彼女は火の中を通り抜けてそれを証明しました。それではどうしてラーマは彼女を森の中へと追放したのでしょうか？ それはまったく残酷で、実に心ない仕打ちではなかったのでしょうか？」

私はそれ以前に、スワミが神のドラマについて話されたのを聞いていたので、私は正しい展望を以て、この質問に答えることが出来ました。私は次のように答えました。

「あなたも私も、シーターに会ったことがないにもかかわらず、彼女が純潔であることを知っています。私たちがそれを知っているのはなぜですか？ それは私たちに信仰心があるからです。さて、シーターを見たこともない私たちでも、これほど彼女の純潔を確信していますが、あなたは、ラーマが彼女と共に暮らしているながら、そのことを知らなかったとおっしゃりたいのでしょうか？ また、ラーマは衆人環視の中でシーターに火の中を通らせたのではなかったのでしょうか？ 彼女が無垢であることをそれ以上に証明する何かが必要だったのでしょうか？ それでは、実はラーマは、シーターを追放することによって、権力を持っている人々にメッセージを送っていたとは考えられないのでしょうか？」

次に私は、この女性とその場にいた聴衆に、非常に道徳的で正しいと言われる、非常に評判のよい一人のインドの政治的なリーダーの話をしました。私の考えでは、彼

はむしろ独りよがりのように思えました。彼は毎日ギターすべての詩節を読み、しばしばトゥラスィーダース版のラーマヤナの講演をしていました。彼自身は、色々と話題になっていたにもかかわらず、政治的には実に潔白で、経済的にもまったく墮落していませんでした。さて、この男には非常に疑わしい息子がいました。この息子は、父の地位を利用して、自分のためにあらゆる便益を確保することを顔色一つ変えずに行っていました。全国の人々がこのことを知っていました。新聞はいつもそのことを書き立てていました。この男の妻の自殺は、彼の素行の悪さが原因していたと信じられています。ところが、その父親はインドの首相になったときでさえ、息子の不正な行動には一度も注目しなかったのです！ マハーバーラタの盲目の王がそうであったように、この政治家は息子の犯す悪事には全く無関心でした。この点について色々と説明した上で、私は質問者の婦人に次のように言いました。

「私の考えでは、ラーマ神はただ単に、今の時代の権力者たちで、身近な人々が権力者に近いことを悪用して富や様々な便益を蓄積することを許している今日の人々に、見本を示していらっしやっただけだと思えるのです。これは多くの国で起こっています。ラーマはシーターを追放することによって、私たち全員に教訓を与えていらっしやっただのだと私は思います。結局のところ、神が降臨されるのは、常にメッセージを伝え、教訓を与えるためです。ラーマアヴァターにおいては、教育プログラムに参加した登場人物がたくさんいた、ということだと思います。」

私は、ラーマヤナに関する本を出版しました。それは二巻から成るもので、85歳の御降誕祭の直前に、バガヴァンによって祝福されました。第一巻はヴァールミーキが語ったラーマヤナに基づいたもので、多くの美しい挿絵が入っています。第二巻には、全巻にわたって、ラーマヤナが今の時代にどのように役に立つかということが書かれています。もし皆さんがそれを日本語に翻訳して出版したいと思うのであれば、喜んで、a) この本全巻のテキストと、b) すべての挿絵のソフトコピーを始めとする様々な画像を皆さんが入手できるように手配してあげましょう。

**問い：** スワミはかつて、人々にメッセージを送る際には、媒体となる人は使わないとおっしゃった、と私は聞いています。でも、どうしてアシュラムの本屋さんでは、シーマデーワンさんの本が売られているのでしょうか？ 例外もあるということなのでしょうか？

**回答：** 私個人に限って言えば、私自身は、夢とかテレパシー的なメッセージなどのようなものに重点を置いたことはありません。おそらく人々は、様々な体験をすることでしょう。それと同時に、私は、それらのものは純粋に個人的な意味合いで授けられる体験であると信じています。こうしたこと一番良い例は、ジェームス・シンクレア氏が持つことのできた素晴らしい体験でしょう。彼はそのことについてほとんど話すことはなく、スワミご自身がそれを話さないとおっしゃったときに話すだけです。

アシュラムの本屋で売られている本のことですが、私はそれを管理しているわけではありません！ ですから、彼らの代弁をすることは出来ません。私に言えることは、私個人が関係しているメディア部門においては、その種のもの出版しないということだけです。